

No. 57
2014. 4

世田谷文学館 ニュース

SETAGAYA LITERARY MUSEUM

館長の作家対談

馬淵明子(美術史家・国立西洋美術館館長)



収蔵品のご紹介

芥川龍之介 齋藤茂吉あて書簡

茨木のり子 遺稿を取めた「Yの箱」(『歳月』詩稿) 個人蔵

館長の作家対談

ゲスト
馬淵明子
(美術史家・国立西洋美術館館長)

聞き手
菅野昭正
(世田谷文学館館長)



馬淵明子(まぶち・あきこ)

美術史家。1947年、神奈川県生まれ。東京大学教養学部フランス科卒業後、東京大学大学院人文科学研究科美術史博士課程に進み、この間にパリ第4大学に留学。博士課程満期終了後、東京大学文学部助手、国立西洋美術館学芸課主任研究官、青山学院女子短期大学助教授を経て、日本女子大学で20年に亘り教鞭をとった。

『美のヤヌス―テオフィール・トレと19世紀美術批評』で1993年にサントリー学芸賞を受賞。『ジャポニスム 幻想の日本』で1998年にジャポニスム学会賞を受賞。現在、ジャポニスム学会会長。

2013年8月から国立西洋美術館館長に就任、独立行政法人国立美術館理事長を兼任している。

女性研究者として初の国立美術館館長に就任された美術史家の馬淵明子さんをお招きし、当館館長がお話を伺いました。

学芸職経験者初の女性国立美術館館長

館長▶国立西洋美術館の館長にいつ就任されたのですか？

馬淵▶2013年8月1日からです。

館長▶西洋美術館では女性館長は初めてですか？

馬淵▶独立行政法人になった時に文部科学大臣がされた遠山敦子さんがなりましたが、専門職では私が初めての女性館長です。

館長▶西洋美術館の歴史は何年くらいになりますか？

馬淵▶開館が1959年、半世紀を過ぎたところですが、2009年に50周年を行いました。

館長▶独立行政法人国立美術館の理事長も兼任されていますね。国立新美術館の開館で国立の

美術館数が増えましたが、全体にとってなにか大きな変化はありましたか。

馬淵▶理事長は、国立美術館5館(国立西洋美術館・東京国立近代美術館・京都国立近代美術館・国立国際美術館・国立新美術館)全部を均等にしなければならぬ立場です。東京に西洋美術館と近代美術館、新美術館、京都の近代美術館、大阪に国立国際があります。一番最初は東京の近代美術館、国立国際が大阪万博の後、新美術館はずつと新しく2006年開館と、それぞれ歴史と役割も違いますので、一つにまとめるのは難しいです。

館長▶現在、全国に美術館は沢山ありますが、女性館長はかなりいらっしやいますか？

馬淵▶少ないですね。専門職、行政職から就かれた方を合わせても十指に満たないかもしれません。国立では博物館を含めて他にはいません。

館長▶そういう事を考えると馬淵さんの責任は重いかもかもしれませんね。

ます。フランス共和国万歳！というイメージですよ。フランス共和国万歳！というイメージです。

館長▶フランスの雑誌記事に、『ラ・リベルテ』をあの国に貸し出すかが議論されていると書かれていました。その国との提携を強化する一つの手段でしょうか。

馬淵▶フランスは、美術作品を国家的なプロジェクトとして海外に貸すことを非常に意図的にやっていますね。日本はまだ美術の力を信じていないのか、日本美術を持って行くことで日本の文化力を示そうとまで至っていない気がします。実際問題としては、日本の古美術は傷みやすいので、持って行くのが難しいですけど。

館長▶国立美術館に携わっておられて、美術、芸術が日本の国際的な交流に果たしうる役割について、認識が行き届いていないとお考えですか？

馬淵▶もう少し戦略的に考えてもいいと思います。国のレベルでは、日本のイメージより外交力なりの助けになるものはお金だと、いまだにストリートに出てくる気がします。そうではなくて美術品を貸し、それに伴って人も出かけて行って、日本の美術、文化とはこういうものだと思し、そういう事で培われる力をもっと少し信じてもいいと思います。それから少し話が変わりますが、日本はもう少し日本の価値基準を作った方がいいのではないかと気がします。私が衝撃を受けたのは、パリの真ん中にオセアニアやアフリカ、アジア、北米と、非西洋圏のものが集められた国立のケ・ブランリ美術館が開館したことです。

館長▶シラク大統領が推進した美術館ですね？



館長▶シラク大統領が推進した美術館ですね？

馬淵▶そうですね、こけると大変な事になるのではないかと(笑)。今の美術館は女性学芸員が多いです。大学で美術史を学ぶ割合も女性が多いたく、そこからどんどん学芸員が出てきています。私が西洋美術館にいた頃は、学芸課に女性1人、男性9人という状況でしたが、現在では西洋美術館でも学芸課の男女比が同じ位です。

芸術文化、学者の力を活用する国

館長▶ル・ブル美術館といえば、ランスに分館ができたそうですね。

馬淵▶アジアはあまり知りませんが、ヨーロッパはもう女性の方が多いです。アメリカも分野によるんです。なぜか彫刻とか古代美術とかは男性が多く、近代、装飾・工芸は女性が多いですね。フランスでもオルセー美術館は女性の方が多いですし、ル・ブル美術館も半分位は女性ではないかと思えます。

馬淵▶もの凄いパワーがそこに溢れていて。地図を見るとヨーロッパ以外の世界が圧倒的に広い。よく考えると西洋は小さい地域にすぎないわけで、確かにひとつの凝縮した価値を作ったのは凄いことだと思いますが、西洋絵画のルネサンス以来の共通価値もただか500年だとも思うんです。それを日本では国際的なスタンダードと見て、伝播し、教えてきたのがとても狭いものに見方のような気がして、それ以外のものをもう少し見ていかなければいけないと感じました。またパリのど真ん中にそういう美術館を作ったフランス人の凄さと、二つの衝撃を受けました。

ジャポニスムとの出会い

館長▶馬淵さんにとって一番印象に残っている西洋美術館での仕事は何でしょう。

馬淵▶やはり1988年のジャポニスム展です。今でもジャポニスムの仕事が一番多いですね。

館長▶どういうきっかけだったのですか？

馬淵▶私が西洋美術館の学芸に入ってから間もない時、オルセー美術館がオーブニングの展覧会の一つとしてジャポニスムをやりたい、については西洋美術館と一緒にやらないかと言ってきました。

馬淵▶1986年ですが、その前から準備をしますので、西洋美術館からの担当者としてフランス美術研究者の私が行きました。私は最初、ジャポニスムに懐疑的でした。

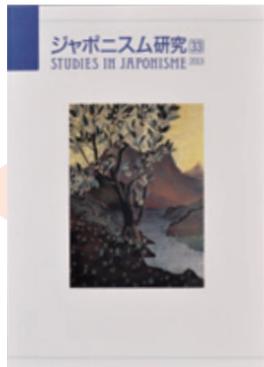
館長▶展覧会がうまくいくかに関してですか？

馬淵▶そうではなく、ジャポニスムがどれ

くらい大きな現象だったのかということに対して懐疑的でした。芸術の展開の中で新しいものが出てくるために日本が与えたインパクトというのは、実はそれほど大きくなかったのではないかと。そうしたら、オルセーの学芸員に、そんなことはない、日本の影響がなければこういうものは絶対現れなかった、不可能だったといちいち例証され、日本の美術の特色を入れたのは非常に大きなことだと説得されました。展覧会準備でヨーロッパをあちこち一緒に調べに行く間もずっとディスカッションです。その度に、ほれ見ろ、ここに日本のこんな凄いものがある、これがこれに変わってきたでしょ、と。見ると確かにそうなんです。日本でのジャポニスム論は手前味噌というか、日本人ゆえに我田引水で論じているのではないかと、その見方を変えるほどドラステックではなかったのではないかと考えていましたが、だんだん説得されてしまいました。

東西の文化的意識の違い

馬淵▶ジャポニスムが面白いのは、西洋の人が見た日本のイメージだということなんです。そのイメージにも高度な芸術的部分と、もっと通俗的な部分があつて、今、私は通俗的な部分に興味があります。要するに一言でいえば、日本は「芸者の国」だということ。文化的に遅れている封建国家で、非常に女性的な文化である。小さいものが好き、かわいらしいものが好き、一過性なものが好きで構造的なものがなく、表層的で移ろいやすいもの。それはそれで素敵だけど、やはり西洋の方が上だという発想から日本を見ているわけです。その例として、1871年あたりから1900年頃に日本人が出てくるお芝居がいくつも作られます。荒唐無稽で日本と中国との区別もついてい



『ジャポニスム研究』第33号、2013年12月、ジャポニスム学会



『ジャポニスム 幻想の日本』新装版、2008年、ブリュッケ

ないようなものですが、その中から15本ほどピックアップして調べています。1900年には日本人女優の貞奴の舞台がパリで上演され、1902年に「蝶々夫人」があつて、徐々に現実を反映したものに変わつてくるので、対象を1900年までにしましたが、その間によくまあこんなありもしないものを勝手に作つてと思うようなものがある。いつばい出てきて(笑)。早く本に書きあげたいのですが。

館長▶ どういう劇場でやっていたのですか。台本が残っているのですか？

馬淵▶ 台本はほとんど残っています。オペラ座でバレエをやったり、オデオン座でやったりと上等な所でもやりますし、小さな小屋みたいなどころまで様々です。

館長▶ いつ頃からですか？

馬淵▶ 最初は小さな作品で1870年代、80、90年代も結構あります。

館長▶ ジャポニスムがフランスで注目を浴びたのは1880年代ですか？

馬淵▶ 90年代前後ですね。日本が清やロシアとの戦争に勝ち、西洋と互角になろうとするのを境に、日本に対する興味が冷めていきます。やがて芸術家を取り込む日本のビジョンには造形上のモダニズムに繋がっていくものがあり、通俗的な芸者の国・日本というイメージは使い古され、要らない幻想になつてゆく。そういう二つの両極端がジャポニスムの持つている幅だと思っています。

館長▶ フランスにジャポニザンという言い方がありますが、一人のジャポニザンの中に、芸術的に同時に通俗的にと、総合的に見るということもあるのですか。

馬淵▶ 共存していることもありますね。提灯、団扇や着物の布切れのようなものから美術品まで日本の品物が西洋に沢山入つたわけですから、一

端だけ見ているにはジャポニスムの全体像は見えないと思います。最近では通俗的な側面にも眼を向ける研究が増えてきて、屏風がどのように使われたか、扇子がどのくらい使われたかと、大衆の生活の中で消費されたものについての研究も出てきています。以前は

印象派の造形的な部分を提供したのは日本だという論述が多かったですが、現在のジャポニスム研究は非常に幅広いです。

館長▶ 実際に日本の浮世絵の影響を強く受けた画家もいるわけですね。構図を日本的なもの、日本の作品から汲み取った作品が多いですよ。

馬淵▶ 構図、それから色彩も多いです。

館長▶ それから遠近法の違いが彼らにとつては非常に大きな発見だったわけですか。

馬淵▶ そう思います。西洋美術ではルネサンスの遠近法による空間の組み立てが重要で、美術アカデミーでくり返し叩き込まれます。ところが、19世紀の半ば頃、透視図法的なものの方見方に画家たちは違和感を持ち、必ずしも人は遠近法だけでもを見ていないと実感的に分かる。高い所から下を見る場合、下から見上げる場合、あるいは瞬間的に何か目の前に物が邪魔してくる場合、ド



ガの作品のように鍵穴からものを見る場合―こうした色々な視覚的な体験は遠近法の世界では描けないことに気づきます。それをどう表すか、という問題意識を画家たちが持つているところに日本の浮世絵に出会った。では、彼らは浮世絵を描くかというところ

ではなく、浮世絵の中の自分たちに使えるものだけを取り出していきます。西洋人の賢さというが強いです。浮世絵が違うものの見方と違う表現の仕方を持つていることに西洋の画家は気づき、それを使つたという事です。

館長▶ 非常にうまく使えますね。小さなきつかけはあつたかも知れないけど、そのままこちらに移すのではなくそこから新しいものを創造する感じが、印象派の絵にも強くありました。

受容してもそれの中で変えて新しいものを創造していく。このプロセスで芸術を作るんですね。文学でも何でも、その辺が日本人と違うのではないのでしょうか。文学でも18世紀にゲーテはペルシャの詩にとっても関心を持って読み『西東詩集』を作る。非常に影響を受けていることはわかりますが、ちゃんとドイツの詩になつていて、影響を受けながら自分の本来作つていたものとそれほど変わらないものにしてしまう。

館長▶ 難しいところですね。美術館でも文学館でも博物館の共通した悩みでしょう。西洋美術館の仕事をされる上ではいかがですか。

馬淵▶ 難しいですが、西洋というものを相対化するのは外にいる人間だと思います。コレクションとして日本美術を持つていませが、西洋人が見えない西洋を見せられたら一番いいのかなと思います。西洋美術館の松方コレクションも組み合わせせて展示を変えると面白くなります。また、他の国立美術館と一緒に何かできないか、ある自然表現、例えば鳥とか木とかをどう描いたかの違いや、同じテーマのものを並べてとか。あるいは、実際に凄く違いますけど、17世紀のオランダと17世紀の日本のものを並べるとか。その一方で、国立

馬淵▶ そうですね。88年のパリでのジャポニスム展の時に反論がいろいろ出ました。フランス人は、日本から来たものにそれほど重要な影響を受けたといえるのかと。確かに構造的に変えているので、見たところそっくりではない。そこで、何故これは浮世絵が元になっていると言えるのかという論理が出てくる。そっくりそのまま使わないのはプライドというか、厚かましきのためですが(笑)、自分たちのものにしてしまう強さですけど思います。逆を見ると、明治以降、西洋画を習得して渡欧した日本の画家の多くが上手く空間が描けない、色が出ないと苦しむのは、彼らがフランス人みたいに描きたいと思つていたらだと思ひます。フランス人は日本人みたいに描こうとは思つてなかつたというあたりが、国力の差というか。

館長▶ 東と西の差というか、あるいは文化的な意識の違いですね。

展覧会でめざすもの

館長▶ 馬淵さんは学生の頃はクロード・モネを専門に勉強されていたと記憶しています。当時僕は東大教養学部のフランス科主任だったので卒業論文も拝見しました。その当時、モネをジャポニスムと繋げて関心を持たれたことはなかつたのですか？

馬淵▶ あの頃は意識しませんでした。私が学んでいた頃には主流ではありませんでした。

館長▶ 日本人は印象派の画家の中でモネが一番関心があるのではないかと思います。どうしてでしょう。

馬淵▶ 大原美術館や松方コレクションのような早い時期に日本に持ってこられたモネの絵が良かったことは、大きな影響を与えたと思います。パピールの頃にもものすごく買って、日本国内にモネが西洋美術館でやらなければ開かれな展覧会テーマというのがあると、学芸員たちと話しています。近代ばかりでなく、西洋の古代、中世の展覧会をきちんとやろうとするのはうちの館だと思ひます。そういうところもやらないといけない、ではどうやってやろうかという話になりました。来場者の数字が残る展覧会よりも記憶に残る展覧会をやりたいですよ。後で「あの時の」つて言われるような、ずつと言ひ伝えられるような展覧会を。

館長▶ 大いに楽しみにしています。大変なお仕事に就かれて、健康に気を付けて頑張ってください。本日はありがとうございました。

馬淵▶ ありがとうございます。

(2014年1月17日 世田谷文学館館長室にて)

展覧会のご案内



茨木のり子展

自分の感受性くらい
自分で守れ
ばかものよ

(「自分の感受性くらい」)

現代の女性詩人のなかで最も人気のある一人、茨木のり子(1926-2006)。朝日新聞「天声人語」に紹介されたことから詩の愛好者を超えて大きな反響を呼んだ「倚りかからず」、中学校国語教科書にも掲載されている「わたしが一番きれいだったとき」

をはじめ、「自分の感受性くらい」「六月」「汲む」などの詩で知られています。「品格で書かれた」、「人格で書かれている」とも評される詩の、自らを律し鼓舞する言葉は、読む人の心にも深く響きます。

本展覧会では、詩稿、草稿、創作ノート、「權」同人をはじめとした詩人たちとの書簡、先立つた夫のために書かれ、没後刊行された『歲月』遺稿など、貴重な資料を通して茨木の詩作世界をひもとくとともに、女性として日常を大切に暮らした姿も日記やスクラップブックなどからご紹介いたします。

最愛の夫を亡くした翌年、50歳で韓国語を学び始めた茨木は隣国とその文化への関心を数々の著作に記し、14年後には韓国現代詩の翻訳刊行を果たします。このように大きな喪失感から自ら歩を進め、たおやかに、且つ凛として“倚りかからず”生きた彼女の詩と文章は、先行きに不安を抱く私たちが汲むべきものに富み、生きることに清々しい勇気を与えてくれることでしよう。 *観覧料:8頁をご覧ください。

関連イベント 会場:世田谷文学館 1階文学サロン

1 こどもワークショップ
日時 =5月11日(日)14:00 ~ 16:00
講師 =石津ちひろ(詩人)
対象 =小・中学生
定員 =事前申込100名(未就学児、付添の大人も参加可)
参加費 =無料
申込締切 =4月27日(必着)
*申込ハガキに、参加されるお子さん全員の年齢か学年を明記してください。

2 記念対談
日時 =5月17日(土)14:00 ~ 15:30
出演 =谷川俊太郎(詩人)×小池昌代(詩人)
対象 =一般
定員 =事前申込150名
参加費 =500円
申込締切 =5月3日(必着)

3 記念講演
日時 =5月25日(日)14:00 ~ 15:30
出演 =金裕鴻(NHK文化センター講師)
対象 =一般
定員 =事前申込150名
参加費 =500円
申込締切 =5月11日(必着)

4 記念コンサート「茨木のり子を弾き語る」①
日時 =6月21日(土)18:00 ~ (終演予定19:30)
演奏作品 =「りゅうりえんれんの物語」(詩:茨木のり子) 全曲演奏
出演 =沢 知恵(シンガーソングライター)
対象 =一般
定員 =事前申込150名
参加費 =1,500円
申込締切 =6月7日(必着)

5 記念コンサート「茨木のり子を弾き語る」②
日時 =6月22日(日)16:00 ~ (終演予定17:30)
演奏作品 =「わたしが一番きれいだったとき」、「自分の感受性くらい」
(いずれも詩:茨木のり子)他
出演 =沢 知恵(シンガーソングライター)
対象 =一般
定員 =事前申込150名
参加費 =1,500円
申込締切 =6月8日(必着)

参加申込方法

いずれも各締切日までに往復ハガキにて、① イベント名 ② 参加者全員の氏名・住所・電話番号 ③ 返信面に代表者の氏名・住所を明記のうえ、世田谷文学館「茨木展関連イベント」係までお申し込みください(1イベントにつき1枚、①は付添の大人を含めて何人でも連名可、②-⑤は3人まで連名可)。応募者多数の場合は抽選となります。結果は締切後、返信ハガキでお知らせします。④⑤については、未就学児の参加はご遠慮ください。

2014年度の企画展

茨木のり子展

4月19日(土)～6月29日(日)
*5頁でご紹介しています。

きょうの想像力があすを築く
日本SF展・SFの国

7月19日(土)～9月28日(日)

水上勉のハローワーク
「働くことと生きること」

10月18日(土)～12月21日(日)

第34回 世田谷の書展

2015年1月6日(火)～1月21日(水)

岡崎京子展

2015年1月24日(土)～3月31日(火)



ムットーニ《漂流者》2006年
原作:夏目漱石『夢十夜』より「第七夜」

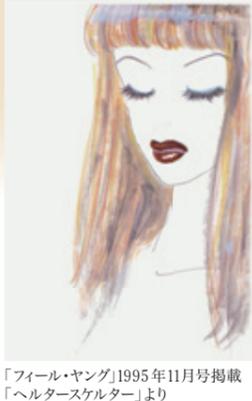


小松左京「日本沈没」創作メモ



水上勉

写真提供:文藝春秋



「フィール・ヤング」1995年11月号掲載
「ヘルタースケルター」より
©岡崎京子/祥伝社フィールコミックス

コレクシヨン展(前期)
「人生の岐路に立つあなたへ」
4月19日(土)～10月5日(日)
世田谷文学館は1995年に開館し、まもなく開館20周年を迎えようとしています。収蔵資料も現在9万点を超え、これまで企画展やコレクシヨン展でご紹介を続けてまいりました。
本展では、結婚や家づくり、仕事やプライベートの活動など人生の様々な局面で、岐路に立った作家たちがどのように生き、作品に描いたかを当館コレクシヨンから見てゆきます。
一編の詩や小説が、時に人生を変えるほどの力を持つことがあります。展示室で、あなたの人生の大きな選択を助ける文学作品と出会えるかもしれません。
さらに、文学作品の一場面を小さな舞台と人形、音と光で表現する「ムットーニのからくり劇場」と、人形作家・石塚公昭氏による写真展「SETAGAYA作家のいる風景」もあわせてお楽しみいただけます。
*観覧料:8頁をご覧ください。

- 平成25年度世田谷文学賞
- 5部門で募集を行い、933人の方から作品が寄せられ、次の方々が入賞されました。応募者の最高齢は94歳、最年少は8歳でした。入賞者の作品は「文芸せたがや」32号に掲載しています。(税込500円 当館ミュージアムショップ、およびオンラインショップにて販売中)
- *次回募集は平成27年度です。
- ◎短歌〔応募者511人〕
 - 一席 水野真幸
 - 二席 石本一美
 - 三席 鈴木智裕
 - 三席 九里亮太
 - 秀作 我妻高大
 - 秀作 安部葉子
 - ◎随筆〔応募者65人〕
 - 一席 寺田正臣
 - 二席 山水條太郎
 - 三席 宮下浩子
 - 三席 中古苑生
 - ◎詩〔応募者94人〕
 - 一席 丸山由生奈
 - 二席 石川厚志
 - 三席 駱駝一間
 - 三席 吉瀬詢菜
 - 秀作 柳東玄
 - 秀作 窪田貴子
 - ◎俳句〔応募者193人〕
 - 一席 池亀恵美子
 - 二席 木瀬晴也
 - 三席 弓削一江
 - 秀作 佐藤富美栄
 - 秀作 大瀬俄風
 - ◎川柳〔応募者70人〕
 - 一席 設楽喜春
 - 二席 米本卓夫
 - 三席 内田恵子
 - 三席 城内光子
 - 秀作 松永弘之
 - 秀作 萩原千賀子



資料受贈報告

- ▼稲村龍谷様より篆刻作品および印影額「世田谷文学館」、岩間慎子様より岩間芳樹旧蔵資料一括
- ▼天野英様 岩崎京子様 こやま峰子様 杉本利男様 平山規子様 村岡功様 谷古宇尚様
- ▼アジア文化社 芦屋市谷崎潤一郎記念館 安中市学習の森ふるさと学習館 泉鏡花記念館 市川市文学ミュージアム

一茶記念館 愛媛人物博物館 大同信ことば館 学習院大 学史料館 かこしま近代文学館 鎌倉文学館 北九州市立 松本清張記念館 こおひやま文学の森資料館 国立国会 図書館国際子ども図書館 高志の国文学館 さいたま文学 館 埼玉文化会 齋藤茂吉記念館 坂の上の雲ミュージアム 昭和館 浅草寺教化部 仙台文学館 タイムドーム明石 (中央区立郷土天文館) 高梁比庵会 田端文士村記念館 田山花袋記念文学館 千葉市美術館 沖積舎 調布市武

者小路実篤記念館 通信文化協会 富山県歌人連盟 日本 ユネスコ協会連盟 練馬区立石神井公園ふるさと文化館 春と風出版 福岡市総合図書館 ふくやま文学館 文京ふ るさと歴史館 前橋文学館 町田市民文学館 ことばらんど 棕鳩十文学記念館 本山町立大原富枝文学館 山梨県立文 学館 与謝野晶子倶楽部 四日市市立博物館

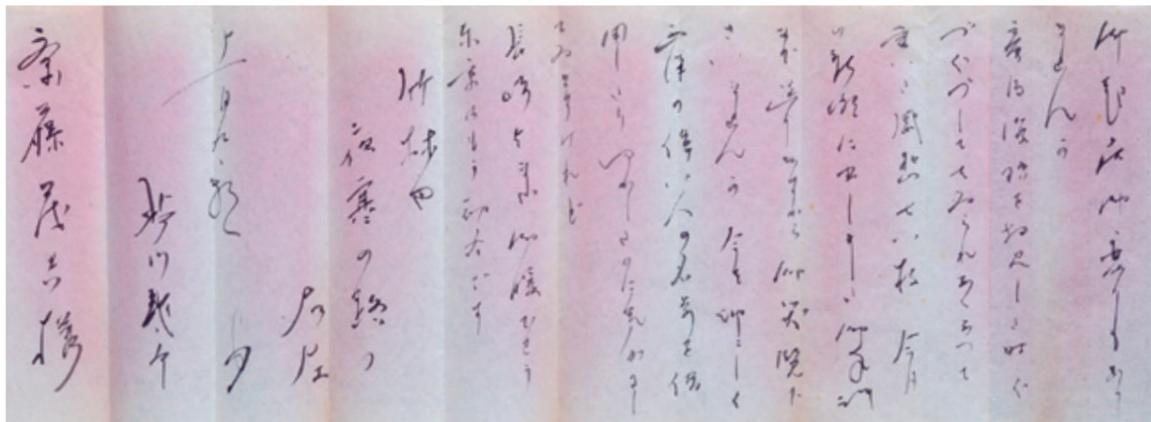
▼「あけび」「新しき村」「阿房芋」「宇宙風」「海」「海紅」が いくつ亭「風花」「寒雷」「橄欖」「くさくさ」「九品仏川柳会

2013年10月11日～2014年2月20日

句会報「群系」芸文あまがさき「原型富山」現代文学史 研究「鴻」心の花「山河」山厩「春耕」春燈「抒情文芸」 「新現代詩」青衣「川柳研究」双鷲「タカラマカン」巖 「玉川台つづれ」多摩のあゆみ「タルタ」短歌人「丹青」 「地中海」伝書扇「飛火」白「翡翠」ブチ★モンド「麗」 「文藝軌道」窓「未定」ゆく春「ランプル」りんごの木 「檸檬」の各誌ほかより資料のご寄贈ご協力いただきました。ありがとうございます。(50音順)

芥川が茂吉に初めて会ったのは、1919(大正8)年5月、友人の菊池寛と共に長崎を訪れた時でした。当時、茂吉は精神科医として県立長崎病院に勤務しており、茂吉の歌集『赤光』を愛読していた芥川は、この旅の折に茂吉のいる病院を訪問します。「お二人とも文壇の新進としてもはや誰知らぬ者も無いといふ程であつたから、私の助手や看護婦なんか、物めづらしさうにお二人を盗見したり、私もあわてて紅茶か何かを持つてくることを看護婦に命じたりした(齋藤茂吉「芥川氏」)。以降、二人の親交は芥川の晩年まで続いていきますがこの年、芥川はひとつの壁に突き当たっていました。

1919年1月、芥川は小説集『傀儡師』(新潮社)を刊行。それまで新聞や雑誌に発表した「地獄変」「蜘蛛の糸」「奉教人の死」などを収録した同書は、芥川の代表作となります。東京帝国大学を卒業したのち、横須賀の海軍機関学校で英語を教えながら作品を発表する二重生活を送っていた芥川は、漸くこの年の春に執筆に専念する環境が整い田端の自宅に戻ります。しかし、なかなか思うような小説が書けず、同年6月から「大阪毎日新聞」に連載した長編小説「路上」の執筆に行き詰まり2ヶ月後に連載を中止するなど、創作上の苦悩が続いていました。そのような時期に、芥川は茂吉の歌論集『童馬漫語』(1919年、春陽堂)を手に入れます。茂吉の作歌態度の真剣さ、文章の気品の高さ、言葉に滲み出る茂吉の人柄に打たれた芥川



芥川龍之介 齋藤茂吉宛書簡 1919年11月9日付

「芸術その他」で芥川は、「芸術家は何よりも作品の完成を期せねばならぬ」、「危険なのは技巧ではない。技巧を駆使する小器用さなのだ」、「僕は人にも僕自身にも僕の信する所をはつきりさせて、自他に対する意地づくからも、殻の出来る事を禦がねばならぬ」といった考えを述べており、作品における新しい境地を模索していた様子がうかがわれます。一方、茂吉は1919年11月19日に次のような歌を芥川に送っています。

長崎の寺のいらかに降るしぐれ音のかなしさ
を君知らざらん
しみじみとみ文讀みし後にはりつむる心おこ
りくるを君に告げなむ

27歳の芥川と10歳年長の茂吉の親交はこの年に始まり、1925年に茂吉が約3年間のヨーロッパ留学を終えて帰国すると、二人の文学者の交流はより深い信頼で結ばれたものとなります。当館所蔵の原稿「僻見」(「女性改造」1924年3月)の中で芥川は「僕の詩歌に対する眼は誰のお世話になつたのでもない。齋藤茂吉に於けて貰つたのである」と、茂吉に対する尊敬の念をあらわしています。

半透明なる雨車あまた廻転す
晩年にさしかかり健康状態が悪化していた芥川は、精神科の医師でもあった茂吉の診察を受けるようになりました。1927(昭和2)年3月28日付の茂吉宛書簡では、芥川の深い疲労がうかがわれます。

御起居御変わりありませんか
童馬漫語を拜見した時ぐづぐづしてはゐられなくなつて書いた感想七八枚 今月の新潮に出しました 御手許まで送りますから御笑覧下さいませんか 今は仰々しく西洋の偉い人の名前を借用したり何かしたのに気がさしてゐますけれど
長崎はまだ御暖でせう
東京はもう初冬です
竹林や夜寒の路の右左 頓首
芥川龍之介
十一月九日朝
齋藤茂吉様

原稿用紙にて御免蒙り候。度々御手紙頂き、恐縮に存じ候。「河童」などは時間さへあれば、まだ何十枚でも書けるつもり。唯婦人公論の「蜃気楼」だけは多少の自信有之候。但しこれも片々たるものにてどうにも致しかた無之候。何かペンを動かし居り候へども、いづれも桶正成が湊川にて戦ひをやるやうなもの有之、疲労に疲労を重ねり候。(中略)この頃又半透明なる雨車あまた右の目の視野に廻転する事あり、或は尊台の病院の中に半生を了ること相成るべき乎。(中略)唯今の小生に欲しきものは第一に動物的エネルギー、第二に動物的エネルギー、第三に動物的エネルギーのみ。
冴え返る枝もふるへて猿すべり
三月二十八日 龍之介 齋藤様

芥川龍之介 齋藤茂吉宛書簡(部分)
1927年3月28日付

当館収蔵品のご紹介50
芥川龍之介 齋藤茂吉宛書簡

は、自身の芸術観、創作に対する姿勢や考えを随筆「芸術その他」(新潮)1919年11月)にあらわし、自らを奮い立たせました。1919年11月9日付の茂吉宛書簡は、「芸術その他」について書かれたものです。

*展示替えのため、4月1日～18日まで2階展示室を、4月7日～18日まで1階展示室を休室します。
 *4月19日は開館記念観覧無料日です。6月7日は、烏山下町まつりのため、全館観覧無料となります。
 *5月2日は65歳以上の方は全館観覧無料となります。(年齢を確認できるものをご提示ください。)
 *本年度より65歳以上の方の企画展観覧料は高校・大学生と同額料金となります。
 *「せたがやアートカード」で、企画展、コレクション展観覧料が割引となります。

企画展



茨木のり子展
 4月19日(土)～6月29日(日)
 2階展示室

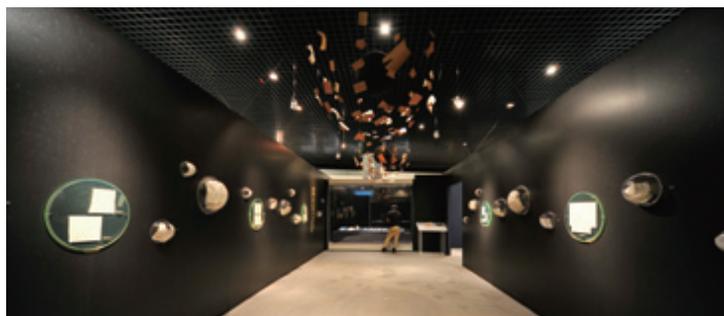
観覧料:
 一般700(560)円
 65歳以上・高校・大学生500(400)円
 障害者350(280)円
 小学・中学生 無料
 *()内は20名以上の団体割引

撮影:谷川俊太郎

日本SF展・SFの国

7月19日(土)～9月28日(日)
 2階展示室

観覧料:一般800(640)円ほか



企画展

茨木のり子展
 4月19日(土)～6月29日(日)

4月

5月

6月

7月

コレクション展

「人生の岐路に立つあなたへ」4月19日(土)～10月5日(日)

日本SF展・SFの国
 7月19日(土)～9月28日(日)

コレクション展

前期「人生の岐路に立つあなたへ」

4月19日(土)～10月5日(日)
 1階展示室

観覧料:
 一般200(160)円
 高校・大学生150(120)円
 小学・中学生100(80)円
 65歳以上・障害者100(80)円
 *()内は20名以上の団体割引
 *中学生以下は土・日・祝日は無料

せたがや文化財団の催し物

- 世田谷美術館 [Tel. 03-3415-6011]
- ボストン美術館 華麗なるジャポニスム展 印象派を魅了した日本の美 6月28日(土)～9月15日(月・祝)



クロード・モネ《ラ・ジャポネーズ (着物をまとうカミュー・モネ)》1876年
 1951 Purchase Fund 56.147 Photograph © 2014 Museum of Fine Arts, Boston.

- 世田谷文化生活情報センター 世田谷パブリックシアター [Tel. 03-5432-1526]

- THE BIG FELLAH ビッグ・フェラー 5月20日(火)～6月8日(日) 世田谷パブリックシアター

作:リチャード・ピーン
 翻訳:小田島恒志
 演出:森新太郎
 出演:内野聖陽 / 浦井健治 / 明星真由美、町田マリー、黒田大輔、小林勝也 / 成河



内野聖陽

- 世田谷文化生活情報センター 生活工房 [Tel. 03-5432-1543]

- 世田谷アートフリマ vol. 21 4月19日(土)・20日(日)



ミュージアム コレクション I

- 陶芸家・吉田喜彦 展 4月29日(火・祝)～6月8日(日)

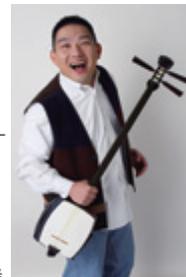


《自然釉のぎ鉢》2011年

- 世田谷美術館分館 向井潤吉アトリエ館 [Tel. 03-5450-9581]
- 向井潤吉 民家十二カ月 4月5日(土)～7月27日(日)
- 世田谷美術館分館 清川泰次記念ギャラリー [Tel. 03-3416-1202]
- 清川泰次一かたちの変遷 4月5日(土)～7月27日(日)
- 世田谷美術館分館 宮本三郎記念美術館 [Tel. 03-5483-3836]
- 開館10周年 宮本三郎の仕事 1920's-1930's 4月5日(土)～7月27日(日)

- 世田谷文化生活情報センター 音楽事業部 [Tel. 03-5432-1535]
- 浪曲師、国本武春のうなりワールド 6月29日(日)15時開演 北沢タウンホール

国本武春 (浪曲、三味線、ヴォーカル)、 沢村豊子(曲師)、 中村信吾(コーラス、アコースティック・ギター他)



国本武春

世田谷文学館が平成25年度地域創造大賞(総務大臣賞)を受賞しました!

地域創造大賞は地域における創造的で文化的な表現活動のための環境づくりに特に功績のあった公立文化施設に贈られる賞で、平成16年度に創設され、今回が10回目です。「文学を体験するミュージアム」の新たなあり方を提示した」のが表彰の理由で、文学館では初の受賞となりました。



これまでご指導、ご協力くださった皆様、叱咤激励して下さった皆様に改めて感謝申し上げます。今後ますます充実した活動を展開するべく努力してまいります。どうぞご期待ください。

休館日:毎週月曜日 (ただし月曜日が休日の場合には開館し、翌日休館 5月5、6日は開館、5月7日休館)

開館時間:10時～18時 (ただし展覧会入場は17時30分まで)
 交通案内
 京王線「芦花公園」駅南口より徒歩5分
 小田急線「千歳船橋」駅より京王バス(千歳烏山駅行)利用「芦花恒春園」下車徒歩5分

公益財団法人せたがや文化財団

世田谷文学館 SETAGAYA LITERARY MUSEUM

〒157-0062 東京都世田谷区南烏山1-10-10 Tel. 03-5374-9111 Fax. 03-5374-9120
 ホームページ <http://www.setabun.or.jp/>

